

W. コリンズ小論

宇佐美道雄

A Short Paper on W. Collins

Michio USAMI

In this paper W. Collins' main works - "Persian Eclogues", "Odes" and "Ode on the Popular Superstitions of the Highlands of Scotland" - are examined chiefly from a sociological point of view. Essence of the discussions can be summarized as next: (1) though these works fundamentally belong to the later classicism, yet their several aspects of motif and technique, for instance, inclination toward the exotic, rural, old, naive, imaginative and emotional, are a sign of new tendency which can be seen in the history of English literature at the middle of 18th century, (2) the new tendency in Collins corresponds with the social change presenting itself at about 1740, in the history of Britain, that is, for example, the advance of Agricultural Revolution, the end of Age of Walpole and the foundation of Methodist Movement, (3) in the latter half of the century, one of the results of such social transition is Romantic Movement in the field of literature, and Collins' work should be highly evaluated as a milestone showing this historical development.

ウィリアム・コリンズの短い詩作期間の初期を飾る「ペルシャ牧歌集」は、1739年ウインチェスター校在学中に起稿され、3年後オクスフォード在学中に出版された。それは詩人が20才の誕生日を迎えて間もない1742年1月のことであった。詩人は、ウインチェスター校で教科書に用いられたトマス・サモンの「近代史」⁽¹⁾を読んで、そのペルシャの記述に興味をそそられ、そこに見た異国情緒を題材にして、この4篇の牧歌を書き上げたと伝えられる。

コリンズが「ペルシャ牧歌集」を書いた前年の1738年には、サミュエル・ジョンソンの「ロンドン」が出て文壇を賑わせたが、この年には、かの「ジェンスキンの耳事件」⁽²⁾をきっかけに、対スペイン主戦論の嵐が、イギリス国民を激昂に駆り立てていた。「ペルシャ牧歌集」の執筆された翌1739年には、イギリスは遂にスペインと交戦状態に入り、さらに両国の抗争は拡大して、1740年

に、オーストリア継承戦へと発展した。そしてオーストリア継承戦への参戦を契機として、20年間にわたった「ウォルポール時代」⁽³⁾が終り、この牧歌集が刊行された1742年に、ウォルポールはその首相の地位をウィルミントンに譲った。このころから、イギリス国内の農業革命は徐々に進行しはじめ、イングランド内において大規模な困込みが、ぼつぼつ見られるようになった。オクスフォード内にはじまったメソディスト運動が、巡回説教を開始したのもこのころ、正確には1738年のことであった。一方、文学界において、1740年にリチャードソンの「パミラ」が出版され、ヤングの「夜の冥想」、フィールディングの「ジョゼフ・アンドルーズ道中記」が、「ペルシャ牧歌集」と同じく1742年に刊行された。

ウォルポールの失墜、メソディズムの創始、農業革命の進展の三者を、18世紀イギリス社会史の中に一転機を画するエポックな事象として捉えることは普通である

(1) Thomas Salmon の "Modern History" は 1725年に ロンドンで 出版され、当時広く読まれた。

(2) 植民地抗争のために英西関係が悪化していた1738年、ロンドンにジェンスキンなる片耳の一船長が現われて、スペイン人から暴行を受けたと吹聴した。イギリス国民は激昂し、議会内にも主戦論が起って、これが1739年対スペイン開戦の口火となった。

(3) ロバート・ウォルポールが政権を握っていた1721年から1742年までの約20年間を、歴史上 "The Age of Walpole" と呼んでいる。

が⁽⁴⁾、イギリスにおける最初の完全な小説と見なされる「パメラ」の出現⁽⁵⁾、ポープの主権にたいする最初の反抗を意味する「夜の冥想」の刊行⁽⁶⁾等、文学界に表われた事象をも含めて、コリンズの「ペルシャ牧歌集」が執筆出版された1740年を中心とするこの数年間に、下部構造から上部構造にいたるイギリス社会総体の中に、ある一つの明白な変動のきざしが表われはじめたということ、つまり、経済、政治、思想、文学等、アン女王の治世以来イギリスの各界を貫いて存在していた、あるステティックな状態が崩壊の転機にさしかかり、そこに、それにとって代わるべき新しいものの胎動が、かすかながら感じられはじめたということ、こういう事実は、「ペルシャ牧歌集」そのものの上にも、それなりに大きな影を投げかけており、そしてそれは、コリンズの詩作品の歴史的意味を考察する上に、欠くことのできない観点を提供している。

しかしながら、歴史年表に記載されている種類の上述のごとき著しい事例を、あまりに過大視することは許されない。歴史の変化は、極めて緩慢に、そして連続的に行なわれるものであり、これら顕著な事象も、結局は、歴史という大河の表面に浮んだ、目立つ泡沫の一つに過ぎないのであるから。事実、コリンズの詩作品に表われた新しさというものも、それを「新しい」と呼ぶにはあまりに微弱であり、コリンズを、古典派の終末と浪漫派の勃興を橋渡しする前衛浪漫派の代表詩人と見なす定説は、彼を古典派の末期の一変種に過ぎぬとする図式によって代わられて然るべきだとさえ思われるほどである。

さて、小品ばかりから成立つ、数少いコリンズの作品集の中で、最長編に属する「ペルシャ牧歌集」は、第1の牧歌から第4の牧歌まで302行から成るが、その詩型においては、ポープが正格と説いた、行末切れ連句の英雄詩体が、全篇を通して間然するところなく貫いてお

り、また、主題としての装いにおいては、第1牧歌の副題に“*Shepherd's Moral*”とあるように、ジョンソンなどが当時の文人に倦むことなく説いて聞かせた、極めて常識的な道徳的訓話、牧歌全体を覆っているのである。用語上の技巧においても、古典派文学の中では、しごくあたりまえの常套的手法、しかし他の時代の文学からは、あまりに人工的で不自然に見える擬人化—「謙譲」(*Modesty*)とか「貞潔」(*Chasty*)とか—の手法が、いたるところに散見される。

そのほか、例えば第4牧歌の56行に見える“*Their Eyes blue languish*”という詩句は、ポープ訳「イリアッド」の“*And the blue languish of soft Alia's eye*”という一行を明らかに意識して書かれているが、これなどは、ポープの影響とか模倣とかいう観点からのみ考えるのが、すでに間違っているとさえ思われる例である。つまり、古典派の文学理論から帰結される当然の結果として、当時の詩壇においては、詩となり得るための用語に一定の限界が生じ、ポープの諸作品などは、それ自体ですでに *stock diction* の教則本の観を呈し、詩人たちは、その許容された詩的用語の範囲内で、表現の巧みさを競い合い、読者もまた、表現の原典を熟知した上で、その変化の仕方を楽しんだのである。このような観点からすれば、コリンズの作品は、何を如何に歌うべきかという基本的な詩概念に関する限り、ポープを主権者とする古典派の理念を、ほとんど一歩も踏み出していないのであり、ここで明らかに、彼を古典派の一変種と見なす図式が、成り立つのである。

コリンズの詩が、その根本において、何ら革新的な要素を持っていなかったにしても、それでは、彼の作品が変種と呼ばれ得る所以、すなわち、微かながら感じられる新しさ、ないし特異さは、どこから来るか。ひとことでいえば、それは素材の面においてであるだろう。「ペルシャ牧歌集」の序文の中でコリンズは、この牧歌集

(4) 例えば英米文学史講座第6巻の「18世紀の世相」の中で、岡本圭次郎氏は「ウォルポールの退陣は、18世紀イギリスの一転機を示している。世紀の初めから、比較的平穩に推移してきた社会の底流に、着々と力を加えてきた新しい勢力、新しい欲望、新しい目的が、このころになって表面に表われはじめ、国民生活の上に反映しはじめた。それは政治的にはピットの出現であり、宗教上ではメソディズムの活動であり、経済面では、産業革命の進行と、それに伴う資本家、中産階級の擡頭である。」のごとく述べている。

(5) 海老池俊治氏は「リチャードソンの書いた長編物語が3つあります。そのうち、彼が最初に書きましたものが“*Pamela*”で、1740年に出版されたのです。それが普通イギリス小説の最初の完全な作品ということになっております。」のごとく述べている。(「ヨーロッパ文学と社会」春秋社、1962年)

(6) 「一冊の注目すべき作品が出版されて、新時期を画している。ヤングの「夜の冥想」の第一部が、1742年に現われて、たちまち名声を博し、しかもその名声は、少くともこの世紀間続いた。……彼の存在意義は、我々にとって明瞭である。「夜の冥想」は、彼の言葉によれば、ポープの「人間論」に欠けているものを捕うのが目的であった。……すなわちヤングは、このポープ社会の主権にたいする一部の反抗を表わしているのである。」(L.スティーヴン：「18世紀における英文学と社会」岡本圭次郎訳、研究社、昭和31年)

を、ペルシャ商人から入手した原稿の翻訳であると断わりながら⁽⁷⁾、世界の各国民には、それぞれの特異性があること、ペルシャの詩体は豊かで華れいであること、さらに、イギリスの詩人は、こういう優雅な心情を味わうには冷やかすぎることを述べている⁽⁸⁾。

コリンズが、自分の作品を、ペルシャ人の手になる原作の翻訳であると偽ったことは、18世紀中ごろにひとしきり流行った、自作の異国文学や、にせの自国古謡を発表するさきがけをなすもので、そうしたことの裏面には自己の内部に在る異端的傾向への後ろめたさが隠されていたことでもあろう。なにしろ、18世紀前半の啓蒙的知識人にとって、自国の現状は、自然に則った、人類の到達し得る最高の状態だったわけであり、中世とか異国とかは、野蛮と醜悪の別名でもあったから、その題材や心情を、現実から遠く遊離したところに求めた作品が、正統を外れた、次元の低いものと卑下されたであろう事情は、十分に推察される。しかしともかく、コリンズが、その最初の作品の題材を、遠い東洋に求めたということは、啓蒙人たちが自然の状態と見なした、自然概念そのものの内容に変化が生じ、現存の秩序にたいする批判とまでいかななくても、等閑視されていた自分たち以外の時代や場所に、関心の目が向けられはじめたことを示す一つの実例と考えることはできるであろう。もっとも、このことに関しては、名誉革命以後のイギリス東洋貿易の急速な進展が、当時のイギリス社会に大きな変革をもたらし、その結果東洋に関する知識と関心が、一般社会人の間に急激に広まりつつあったという、より直接的な要因も考慮されるべきかも知れない。

啓蒙期知識人の心的態度の変化という観点からすれば、同じ序文の中に見られる。各国民の特異性、東洋の

豊かさや華れいさ、さらにイギリス詩壇の冷たさへのコリンズの言及は、一層重要な意味を持つ。普遍の原理と理性による限りない進歩とを、ほとんど無条件に信仰した啓蒙期の思潮からみれば、自国を特異なものの一つと見なし、さらにそれを、豊かで美しい東洋を理解するに余りに冷やか過ぎると認識する彼の態度は、それ自体ですでに一つの新しさといつてよい。

コリンズのウィンチェスター校在学中の同窓生には不思議に俊才が多くて、後年名を成したもののうちには、ジョゼフ・ウォートンと、ウィリアム・ホワイトヘッドの二詩人があった。この二人は、偶然のことながら、「熱狂の人」という全く同じ題名の詩をそれぞれに書いており、ともにありのままの自然を讃美する心情を歌い上げた。ウォートンの「熱狂の人」(当時の思想界において、「熱狂の人」(Enthusiast)という呼び名は、最も忌み嫌われたものであったから⁽⁹⁾、この題名そのものが、すでに反逆的な意味を込めたものであったと想像される)が書かれたのは1740年で、「ペルシャ牧歌集」とほとんど時期を同じくしているが、文化の中心地ロンドンから目をそむけ、あまりに冷たい理性的傾向に反感を抱く心は、1740年前後に20才に達した世代に共通してみられるひとつの特色でもあったようである。ウォートンの「頌詩集」の序文は、浪漫主義復興の最初の文献と見なされており⁽¹⁰⁾、また彼の「ポーブ論」は、スペンサー、シェクスピア、ミルトンの業績を讃えて、ポーブのそれを、これらの詩人たちから識別するためのものであった⁽¹¹⁾から、その意味では、この詩人は、革新的な姿勢という点で、コリンズに一步を先んじていたらしく思われる。

この「ポーブ論」の中でウォートンは、自国の古い時

(7) "I received them (these eclogues) at the Hands of a Merchant, who had made it his Business to enrich himself with the Learning, as well as the Silks and Carpets of the Persians. The little Information I could gather concerning their Author, was, that his Name was Mahamed, and that he was a Native of Tauris."

(8) "Each Nation hath a Peculiarity in all these, to distinguish it from the rest of the World.... The Stile of my Country-men is as naturally Strong and Nervous, as that of an Arabian or Persian is rich and figurative.... Our Genius's are as much too cold for the Entertainment of such Sentiments,..."

(9) 「シャッツベリー伯は、熱狂という病気を直すものは good humour であり、そしてこれこそ敬虔と宗教との基礎であると論じ、それから約30年後ヒュームもまた enthusiast を非難し『希望、矜持、僭越および興奮せる想像は、無智とともに、熱狂の真因である』と極言した。」(英米文学評伝叢書27巻齊藤勇:「コリンズ」研究社、昭和10年)

(10) H. W. Garrod は、その著 "Collins" (1928, Oxford) の中で "Preface to J. Warton's Ode ou Varians Subjects" を "the first critical document of the romantic revival" と呼んでいる。

(11) "The purpose of Joseph Warton's *Essay on the Genius and Writings of Pope* was to distinguish between Pope and 'our only three sublime and pathetic poets, Spenser, Shakespeare and Milton'." J. C. Grierson: "A Critical History of English Poetry" Chatto & Windus, London, 1950

代の文学に着目し、シェクスピアの価値をあらためて評価してみせたが、この歴史および古文学への関心と、シェクスピアへの賞讃とは、やはり、コリンズの特色と完全に一致している。「ペルシャ牧歌集」と同じ年に書かれた、コリンズのたった二つの小品は、二つのながらシェクスピアへの彼の傾倒の深さを物語っており、また、ウォートンが上記「ポーブ論」の中で触れているごとく⁽¹²⁾、そのころコリンズも「文芸復興史」の編纂を企図していたのである。この計画は実際には遂行されなかったけれども、コリンズが「ペルシャ牧歌集」出版の翌年公けにした「ハンマー卿への献詩」の中では、彼はヨーロッパ詩壇の変遷を辿ることによって、自己の歴史研究にたいする興味の深さを表現した。

ウィンチェスター出身の上記三人の同窓生たちは、1740年ごろともにオクスフォードに在ったが、これら若い文学青年に共通した新しい気運は、自国より異国へ、都会より自然へ、冷たさより豊かさないし熱烈さへ、現在より過去へ、畢竟、現実より非現実へ、理性の世界より感情の世界へというコースを辿りつつあった。もちろんその変化は極めて微弱であり、彼らの新らしさは、表面的ないし部分的ではあったが、彼らとしてみれば、それはそれなりに真険だったわけであり、またそれが、その後のイギリス文学に与えた影響という点では、当時のひとびとには予想もつかぬほど大きいものだったのだ。ただ、exoticism, medievalism, emotionalism, love for nature, 等を文学の中核そのものとする一派——浪漫派——が出現してくるためには、コリンズの死後さらに半世紀を要したという事実も、記憶されねばならないのであるが。

「ハンマー卿への献詩」が発表される直前、1743年11月に、コリンズは B. A. を得てオクスフォードを卒業し、その後しばらくの間、特別研究員になるつもりで、なお大学内に留った。しかし、特別研究員になれなかったことと、ロンドン文壇への憧れに止み難いものがあったこととで、翌1744年には、大学を去って上京した。上京後は、文人たちとの交際も拡がり、コーヒー店に出入したり、劇場に通ったりして、詩作に励んだが、丁度このころはオーストリア継承戦のさなかであったから、彼

の後見人の役割りを果していた軍人の伯父マーチンを、フランダースのイギリス軍陣地に訪れたりした。このころ、コリンズは未だ詩人として立とうと、はっきり決意していたわけではなかったらしく、伯父に説得されて、聖職者になる約束をして帰国したが、ロンドンに着くや予定が変わって、また文人生活を続けた。こうして1740年から1744年ごろにかけて、彼が書き貯めた頌詩は、1746年の暮、一卷にまとめて出版された⁽¹³⁾。その中には、「1746年の始めに書かれた頌詩」、「自由への頌詩」、「平和への頌詩」のごとく、時局を反映して、愛国的主題を歌ったものも含まれた。

1744年にポーブが長逝し、翌年スイフトが死んで、ロンドンの文壇は文字通り一時期を画したが、ここに刊行された「頌詩集」においても、6年以前の「ペルシャ牧歌集」にくらべて、コリンズに見られた新しい傾向は、一層明確に姿を現わした。友人ウォートンも、同じく1746年に頌詩集を発表しており⁽¹⁴⁾頌詩のみの詩集を発行すること自体が、すでに、若いグループに共通した変化の萌しを表わしていた。もっとも、それまでの詩壇においては、英雄詩体で書かれた書簡詩ないし諷刺詩が、詩作品の主流を形成したというだけであって、事実、ポーブも優れた少数の小頌詩を書いたのであり、コリンズたちが採用した詩型（頌詩）の新らしさも、決して一定の限界を越えるものではなかったのであるが。つまり、頌詩集においては、在来の詩風にたいする若い世代の不満、あるいは彼らの内面に燃えはじめた新しい関心というものが、より明確な形をとったということであって、基本的な詩概念そのものの変革と錯覚されてはならないのである。

「頌詩集」の冒頭に置かれた二つの頌詩——「憐れみへの頌詩」と「恐怖への頌詩」——は、コリンズの詩学の根柢が、憐れみと恐怖をもって悲劇の情念と説明するアリストテレスの「詩学」によるものであることを、単的に物語っている。事実、コリンズは「詩学」の註解執筆を企てたことがあるし、「恐怖への頌詩」の中ではソフォクレス、エスキロス等の古典作家を賞讃している。ドライデンやポーブの主唱した古典主義の文学理論が、アリストテレス、ロンギノス、ホラティウス等、およびそれらをもとにした、ボワロー、ラパン、ル・ボスユー等フランス文学者に基づいていることはいうまでもない

(12) “An Essay on the Genius and Writings of Pope” (Oxford, 1756) の中でウォートンは、「法王レオ10世が文学および美術について与えた特別な奨励については詳述を差し控える。一友人（コリンズのこと）が『レオ10世時代の歴史』を目下執筆中であるから。それは堂々たる時代であり、そして人類史上最大の影響を及ぼした最も重要な事件に満ちている」と書いた。

(13) “Odes on Several Descriptive and Allegoric Subjects” Miller, London. 1746

(14) “Odes on Various Subjects” Dodsley, London. 1746.

が、詩は何を如何に歌うべきかという基本的概念において、コリンズは明瞭にこの一派の流れをくんでおり、そしてそれは、一生変えることができなかったのである。矢木貞幹氏は、ドライデンの文学理論を要約して、「ドライデンが文学の理論的なことがらに触れる場合には、たいいていアリストテレスなりホラティウスなりラパンなりル・ボヌユーなりを引き合いに出している。……例えば、詩の目的は人を楽しませると同時に、人に教えることだとか、その仕事は自然の模倣なのであるが、自然や人間の本来の姿をうつすことにあるとか、表現は最も大切だから格調や形式を整えることだとか、それから喜劇や滑稽劇や諷刺詩その他についての見解など。……そういう面から見ると、ドライデンは立派な古典主義者であった。」⁽¹⁵⁾としておられるが、アクセントの置き方の均一でない点を除けば、コリンズの詩概念は、大すじにおいてこれと一致している。

「頌詩集」の中では、教訓調というものは、「ペルシヤ牧歌集」の場合とくらべて、影をひそめたけれども、詩が人を楽しませるべきものとする考え方は、表現における格調や形式の強調と相俟って、古典派文学理論の美事な結実を示した。「夕暮れへの頌詩」の中に見える。

and marks o'er all

Thy [evening's] dewy finger draw
The gradual dusky veil.

(あなたの〔夕暮れの〕露にぬれた指先が、
すべての上に、くらいヴェールを
静かにかけていくのを見る。)

という詩句は、「失樂園」の第4部に出てくる

Apparent Queen unveil'd her peerless
light, / And o'er the dark her silver
mantle threw.

(目に鮮やかな女王は、類いなき光を現わし、
やみの上に、銀色の覆いを投じた。)

という詩行を連想させるというが⁽¹⁶⁾、このコリンズの夕暮れの形象は、その音楽的美しさ、視覚的な鮮明さ、生き生きとした擬人化などをもって、先人の域をはるかに凌駕していると思われられる。

ドライデン、ポーブにはじまって、18世紀イギリス詩の特色のひとつとなった擬人化という手法も、もともとは、詩の効用と機能に関する彼らの考え方から、当然の

結果として、自然に生み出されてきたものだが、世紀の半ばごろから、この手法は、因襲的に固定化し、擬人化のための擬人化という不自然さに陥る傾向を示した。ところが、コリンズの作品では、観念の論理化ないし抽象化の結果生ずる具象という過程の中に、空想による視覚化、ないし人間感情の移入化という要素が導入されて、手法そのものの変革には至らないままに、独得の技法が生じたのであった。そうした擬人化の最も明瞭な実例は作品の出来、不出来とはかかわりなしに、「音楽への頌詩」の中で、多量に見出される。この頌詩の中では、擬人化された「恐怖」、「怒り」、「絶望」、「希望」、「復讐」、「憐れみ」、「嫉妬」、「快樂」、「喜び」、「飲楽」などがつぎつぎに登場して、「音楽」の楽器を借りて奏でるわけだが、例えば、

Next *Anger* rush'd; his Eyes on fire

In Lightenings own'd his secret Stings:
In one rude Clash he struck the Lyre,
And swept with hurried Hand the Strings.

(つぎに「怒り」が駆け寄る。両眼は火と燃え、
その電光のきらめきに、隠れた毒針が見える。
縦琴をひと打、あわただしく弦を鳴らす。)

Last came *Joy's* Ecstatic Trial,

He with viny Crown advancing,
First to the lively Pipe his Hand address,
But soon he saw the brisk awak'ning Viol,
Whose sweet entrancing Voice he
lov'd the best.

(最後に「喜び」が夢中になって試みる。
ぶどうの冠を載いて進み寄り、先ずは陽気な
色音の笛に手をのばす。だがすぐに活気あふれる
ヴィオラに目を移す。その甘い魅惑の音が
なによりも好きだから。)

ここに現われている「怒り」と「喜び」の形象などは、カテゴリーとしては擬人化に属するにしても、当時の詩壇に通有の、例えばグレイの擬人法などと比較した場合、ずいぶん自由勝手なやり方だということに気付くであろう。コリンズの「頌詩集」が持つ永続的価値のひとつとして、空想と感情の混入したこの種の擬人法を挙げることが正しいと思うが、基本的には、やはりそれは因襲の理論に則った手法だったのであり、ここにコリンズの新しさが示されていると同時に、その新らしさの限界

(15) 矢木貞幹「イギリス批評史—17, 8世紀」74頁, 研究社, 昭和36年

(16) 「英米文学評伝叢書27巻」齊藤勇「コリンズ」101頁参照

も示されていると思うのである。

「頌詩集」の詩型についても、同じようなことがいわれる。頌詩が詩作品の本流から外れたものであり、頌詩の制作のみに専念することが、すでに当時の詩風にたいする、それなりの革新を意味したということは、前に触れたが、コリンズのこの頌詩集の中では、頌詩の詩型そのものに関しても、やはりある意味での新らしさが認められる。元来、18世紀前半は、ギリシャとラテンを文学の規範と仰ぎ、しばしばそれはオーガスタン時代と呼ばれるが、まさにそれは、アウグスタス帝治下の詩人、特にホラティウスの影響の著しい時代であった。書簡詩(Epistulae)と諷刺詩(Saturae)が詩の本流と見なされた事情も、このことと密接に関連しているが、頌詩においても、ホラティウス型の頌詩が、手本として、色々な型でイギリスの詩に移植された。ポーブは「孤独への頌詩」を8音節3行と4音節1行の押韻されたスタンザ形式で書いて、ホラティウス型頌詩の典型を示したがコリンズもこの「頌詩集」の中で、種々に試みられたホラティウス型の頌詩を書くと同時に、一方では、ホラティウス型にたいするピンダロス型の頌詩を、かなり挿入した。因みに「頌詩集」12篇のうち、ピンダロス型は4篇を占めた。

ホラティウスの詩風は、内省的、抑制的で、詩行も整然としており、どちらかといえば、散文的、記述的な傾向を持つのにたいして、ピンダロスのそれは、派手で高踏的で、長短多種類の詩行を複雑に組み合わせ、自然発生的な趣きを持つとされているが、ひとことにいえば、一方が都会的、他方が田園的なのであろう。1754年に、グレイがピンダロス風頌詩と銘打って「詩歌の進歩」を公けにしたが、18世紀の半ばごろから、書簡詩や諷刺詩に代って、感情的な主題を歌う頌詩がひとつの関心を惹きはじめると同時に、頌詩の型についても、都会的、知的なホラティウスの影響が薄れて、田園風で感情に富んだピンダロスが、ひとつの関心を集めはじめたわけである。つまり、コリンズが「頌詩集」の中で採用した詩型だけについても、従来規範と仰がれたものの権威が衰え、詩人たちの内面に燃えてきたものが、その基本的方向は変えないままに、新しい表現形式を求めだしたという、明白な動きを読みとることがのできるのである。

ついでに「頌詩集」に収められた詩のうちでも、最高の傑作と見なされている「夕暮れへの頌詩」の中から、いちばん読者の目を惹くと覚しい、数行にわたる箇所を例に引いて、その素材の面の特性に触れておきたい。

Then let me rove some wild and heathy Scene,
Or find some Ruin 'midst its dreary Dells,
Whose Walls more awful nod
By thy religious Gleams.

(そんなとき、ヒースの荒野をさすらって、
淋しい谷間に、あなたの(夕暮れの)神々しい
光を受けて、廃墟の壁がうやうやしく
うなずくのを見たいと思う。)

この4行は、後にコリンズ自身が書き変えを行なったから、韻律や形象については問わないことにして、ここでは、「さびしい谷間に建つ古い廃墟」という、素材に表われたコリンズのゴシック趣味に注意を向けたい。だいたいこの頌詩は、その舞台を人里離れた田園の静けさの中に求めており、その種の都会への嫌悪自体、すでにある意味での新らしさを意味したが、さらにそうした荒涼たる自然の中に、中世の廃墟を点在させたという事実はとくに興味を抱かせるに足る。18世紀中ごろから顕著に現われたゴシック・リバイバルの風潮⁽¹⁷⁾というものについて、ここに詳述する意図は持たないが、それは、ブレア、マレット、グレイ等、いわゆる墓畔詩人に見られた「崩れかかった壁」や「こけむす修道院」への讚美と揆を一にするものであり、それはさらに、統一と優美を尊ぶ古典派の美学を考えるならば、一時代の美意識そのものの変貌にまでさかのぼることのできる現象でもあった。

コリンズの「頌詩集」は、彼のオクスフォードでの大学生生活の終りから、ロンドンでの文人生活の始まりにかけて産み出されたもので、この時期は、コリンズの短い詩作期間のうちでは、いわば最盛期に当っており、初期の「ペルシャ牧歌集」と比較した場合、やはり相当の進化をうかがわせる。「牧歌集」に見られた異国趣味という素材の新らしさは、「頌詩集」においては、さらにゴシック趣味、自然愛好趣味等の要素を加え、それらは、擬人化にみられた特異さや、詩型に現われたピンダロスへの傾斜等、手法上の新らしさとひとつに解け合って詩人の内面に宿った新しい傾向を、極めて初々しい形で明確に現わしてみせた。基本において変化することなく、しかもつぎの時代の萌芽を準備するというコリンズの特色は、ここにも、はっきりとうかがうことができる。しかし彼の詩作し得た期間は、そのときすでに終末に近ず

(17) 1733年にバサースト卿はその庭園の一部にゴシック風の古城を建て、さらに1747年には、R. ウォルポールがその別荘を完全にゴシック風の古城に改装して、ひとつの注目を集めたと伝えられるが、それらは当時流行しはじめた古物蒐集、歴史研究、ゴシック小説の隆盛等と相俟って、18世紀中ごろのゴシック、リバイバルと呼ばれている。

いており、その最後を飾る記念碑的作品は、「頌詩集」出版の3年後に登場した。

現存するコリンズの最後の作品「スコットランド高原地帯の民間迷信の頌詩」は、1749年に執筆され、彼の死後25年を経て、一部消失のまま、1784年エジンバラにおいて公けにされた。この頌詩が執筆された年、伯父のマーチンが死んで、コリンズは約2000ポンドに上る遺産を手に入れた。コリンズは、この金で本屋への負債を整理し、売れ残っていた「頌詩集」をすべて買い戻した上、火中に投じたと伝えられている。このころスコットランドから自作上演の交渉に上京していた劇作家ジョン・ホームと知り合い、わずかの交遊の後、ホームの帰郷に際して「スコットランド高原地帯の民間迷信の頌詩」を、別離のしるしとして贈ったのだ。翌1750年には、コリンズはすでに憂うつ症の兆候を示し、以後病状はますます悪化して、ついには殆んど狂人の観を呈し、再び詩作の筆をとることはなかった。

「民間迷信の頌詩」の執筆と「頌詩集」出版との間には、約3年の年月が経っており、その間にコリンズは、「シンビリーンの歌」と「タムソンの死に寄せる頌詩」の二篇を残すのみであったが、「ペルシャ牧歌集」に始まった彼の数少ない作品も、その制作年代を追って、この最後の「民間迷信の頌詩」のあたりまで読み進むとき、やはりコリンズも、到達すべきところへ来た——わずか10年の間（17才～27才）に、ひとつの時代を生き、為すべきことを為した——という感慨に打たれざるを得ない。もちろん、詩が本質的に変化したというわけではない。相変わらず、歌い出しから「テムズの水の精」(Thames' Naiads)が出てくるし、擬人化された「空想」(Fancy) やら、「羽ある種族」(feathery tribe)のごとき常套的詩語やらが、ふんだんにばらまかれ、そしてこのホラティウス型頌詩が形作られる。当時の詩壇において、如何に詩を書くかが重要な問題であって、何を歌うかは、あまり問うところではなかったわけであるが、そのかんじんの表現形式の点では、コリンズはやはり従来の秩序をほとんど完全に守ったのである。しかし、当時において基本的な問題ではなかったにしても、詩においては何を歌うべきかという、素材ないし主題の問題に関して、この最後の頌詩の中で、コリンズはコリンズなりに、ひとつの行きつくべきところに行きついており、そしてそれは、やはり、詩論そのものの変貌という域に達していると思受けられるのである。

「民間迷信の頌詩」は、13連から成るスタンザ形式で

書かれており、途中25行分が消失したままであるが、その最初の連において、

To thee [Mr. Home] thy copious subjects
ne'er shall fail;
Thou need'st but take the pencil to thy hand,
And paint what all believe who own thy
genial land.

(あなた〔ホーム氏〕が、詩の題材にこと欠くことはない。ただ筆をとって、あなたのよき国のひとびとが、今もって信じていることを、描きさえすればよい。)

といて、コリンズが先ずホーム氏に推奨する詩材は、樺の木の陰に棲む「妖精たち」(fairy people)であり、ブラウニイと呼ばれる「黒い怪物たち」(swart tribes)であり、またスコットランドの島々に住む「魔法使いの予言者たち」(gifted wizzard seer)である。もっとも

Nor need'st thou blush, that such false
themes engage
Thy gentle mind, of fairer stores possess;
For not alone they touch the village breast,
But fill'd in elder time th' historic page.

(優れた学識あるあなたが、このような虚妄の詩材に、その温和な心を用いるのを、恥じる必要はない。それは素朴な村人の心を打つばかりでなく、昔にあっては、歴史の頁を充たしたのだから。)

のごとくいって、シェクスピアやタッソーを例に引いて、迷信や伝説を歌うことへの、幾分のうしろめたさを表明してはいるのだが。しかしともかく、啓蒙期の知識人にとって全くのナンセンスに属し、古典主義の詩人たちにとって、念頭にも浮ばなかった種類の、神秘的ないし超自然的存在を、詩の題材にすべきだと主張するコリンズの考えは、彼の内部に宿っていた新しい傾向のひとつが、それなりに最終的に明確な形をとったと見ることはできるはずである。

悪魔とか妖怪とかいう非理性的超自然物にたいする関心が、啓蒙期の合理的思潮にとって、受け入れ難いものであったことはいうまでもあるまいが、すでに大衆の求めるところに敏感だったデフォーなどが、早くからその悪魔趣味を公言していたごとく⁽¹⁸⁾それはヤングの「夜

[18] D. Defoe は1726年 “The Political History of Devil” を書き、さらに “System of Magic” (1726), “Essay on the Reality of Apparitions” (1727) 等を公けにしている。

の冥想」に現われた神秘主義的ないし感傷主義的傾向と相俟って、1740年代に入るところから、かなり幅広く大衆の趣好にマッチするものとなりつつあった。それはたぶん、理神論の末路を暗示するバトラーの「比論」(1736)⁽¹⁹⁾、ヒュームの「人性論」(1739)⁽²⁰⁾、ウィリアム・ローの「真陰なる呼び声」(1729)⁽²¹⁾等の出現とも密接に関連した現象でもあったことだろう。ともかく、コリンズのこの迷信礼讃は、彼の死後約30年を経て出現したバーンズの妖怪たち⁽²²⁾、さらには、コールリッジやキーツの諸作品に見られた超自然趣味を、遠くから見通す地点に立つものとして、評価することも可能はずである。

「民間迷信への頌詩」の中で、妖怪たちのほかにコリンズが推奨する詩材は、「父親から息子に語り伝えられる」⁽²³⁾ルーンの吟遊詩人たちの歌であり、「風雨激しいアイオナ島に眼る、いにしへの国王たちの墓場」⁽²⁴⁾であり、さらにそれは、「荒波打ち寄せるキルダの孤島の、汚れなき生活」⁽²⁵⁾などである。古謡、異国、中世、素朴——ここに至ってコリンズが希求する詩材こそは、1740年代の若い世代に共通してみられた現実の世界より空想の世界へ、理性の世界より感情の世界へという動き

が、やっと辿り着いた最後の地点でもあった。18世紀前半のイギリス文学界において、現実の世界とは、畢竟ロンドンを中心とする都会の教養ある上流社会人の生活を意味した。実際、ポープの諸作品などは、それを鑑賞し得る聞き手の存在——それは全体からみれば極く少数——を想定しなければ、とうてい理解し難いものではなかったか。さらに、そういう文学的社交界の存在を支えるその背後には、それに対応するだけの一定の社会的、政治的、ないし経済的諸条件が控えていたはずである。要するに、社会そのものが変化しつつあったのだ。ウォルポールの時代を通して蓄積されてきたイギリスの富とエネルギーは、貿易の伸長と植民地の拡大を求めて、オーストリア継承戦という形をとって、海外に向けて奔り出たと同時に、文化面においては、読書する階層の幅が拡大され、文化が地方に滲透し、都会の特定少数にのみ通用する嗜好が、陳腐なものとして化しつつあったのだ。

「民間迷信の頌詩」の最後の連に至って、コリンズは、「静かなるアンナン、牧歌的なテイ、ロマンチックなドンの河水が満たすスコットランドの入江や湖水」に「遠くにあって幸あれ」⁽²⁶⁾と呼びかけながら、

(19) J. Butler の “The Analogy of Religion, Natural and Revealed, to the Constitution and Course of Nature” はキリスト教擁護のための論で、いわゆる自然神教の考えにたいして、啓示宗教たるキリスト教の来世、諸奇蹟、諸啓示、その他宗教上の教義の信じ得べきことを説いたものである。

(20) D. Hume の “Treatise of Human Nature” は、彼の後の二書 “Enquiry concerning Human Understanding”, “Enquiry concerning the Principles of Morals” とともに、ロックおよびバークレーの主理説の哲学を訂正し、完成せんとしたものである。

(21) “A Serious Call to a Devout and Holy Life” の著者 William Law は、有能な神学者、弁証家で、ドイツ神秘主義の主唱者である。彼は福音主義復活に大きな貢献をした。この著書はウェズレー兄弟に深刻な影響を与えて、メソディズムの種子をまいたもので、18世紀英国に、宗教にたいする真陰な、広汎な関心を呼び起した。

(22) バーンズは、「悪魔に」、「シャンタのタム」等の中で、スコットランドに伝わる悪魔、妖怪のたぐいを、数多く詩の題材として取り上げ、傑作を残している。

(23) Taught by the father to his list'ning son (III, 38)

(24) Or thither where beneath the show'ry west

The mighty kings of three fair realms are laid:

Once foes, perhaps, together now they rest. (IX, 166~9)

(25) But O! o'er all, forget not KILDA's race,

On whose bleak rocks, which brave the wasting tides,

Fair Nature's daughter, Virtue, yet abides. (X, 155~8)

(26) All hail, ye scenes that o'er my soul prevail,

Ye spacious friths and lakes which, far away,

Are by smooth ANNAN fill'd, or past'ral TAY,

Or DON's romantic springs, at distance, hail! (XIII, 204~7)

うが、まことにそれは「文学作品がいろいろはっきりと中流階級のひとびとを目標として書かれるようになり、作家としての職業が、現代と同じ形をとるようになってきた」⁽²⁹⁾ことを意味した。文筆にたずさわるものたちにとっては、従来貴族が占めた位置に書肆が坐わり、当時における定期刊行物の急増にもうかがわれるごとく、代価を支払って読書する階層が、中央、地方を問わず、著しくその数を増して、作品の売上げだけで、どうにか作家の暮しが立つような、文学者の商業主義的形態が徐々に整備されはじめたのである。

1740年代に入って著しくなったこの種の文壇形態の変化というものは、当然のことながら、18世紀におけるイギリス商業資本の急速な発展および近代的資本主義体制へのその急速な整備という現象と裏腹の関係にあった。古典派の闘将のひとりジョゼフ・アディソンは、ロンドンの取引所を訪れることを好み、そこに世界の富が集るのを見て喜んだと伝えられるが、ロンドンの人口は、1700年代に入って最初の50万から終りの300万へと増加しつつあったのであり、それは当時において、巨大な消費都市と化するその過程のさなかにあった。つまり、アディソンを喜ばせたロンドンの繁栄そのものが、実は、彼の満ち足りた文人生活の形態を崩壊せしめた、まさにその元凶だったのである。こうした趨勢は、18世紀が進むにつれて足早やに進展していった農業および工業上の変革、ウォルポールの失墜とピットの出現、国教の腐敗とメソディズムの創始、これら一連の著しい社会的諸現象と明らかに呼応していたが、それは、ひとことに還元すれば、社会を担う中心勢力の交替、すなわちブルジョワジーの質的転換という現象であったのだ。

ポープの諸作品は、17世紀における二つの革命を通して国家権力を掌握するに至ったジェントリー階級⁽³⁰⁾の貴族的な心的態度を、はっきりと表現しており、そしてコリンズが、その詩概念の本質的な部分において、ポープの亜流に属したことに、ほとんど疑問の余地がない

と思われる。しかしコリンズは、その秩序の中に完全に満足していたわけではなくて、その不満は、とくに素材の面において、異端的傾向となつて、自己を主張した。G. ハフは、「革新的な萌芽から生み出される現存社会への懐疑は、空想的な精神を自然との新しい交わりの方へ一層向けさせる」⁽³¹⁾というが、コリンズの感じていた当時の詩風にたいする不満と、新しさへの傾向が、当時のイギリス社会全体に瀰満していた国民的不満のひとつの表われであったと見ることも、それなりに正しいように思われる。18世紀のイギリスは、その帰結ともいべき産業革命、アメリカの独立、ナポレオン戦争による第二帝国の確立へと、除々に進行していったが、それは同時に、特定少数に代表される古典的社会から脱皮してより多数による大衆社会へという動きでもあったのだ。世紀の終り近く、これら社会史の変動と呼応して、イギリス浪漫派文学が、奔流のごとく噴出したが、そうした文学的土壌の生成過程を見定めるひとつの目安として、コリンズの作品が意味するものの価値は、まことに大きい。

コリンズは、やはり過渡期の詩人である。コリンズの作品の中には、オーガスタン時代崩壊のひびきと、ロマン主義復興のひびきが混り合って聞えている。G. センツベリーは、「コリンズにおいて、良きものはすべてその人に属し、悪きものはすべてその時代に属す」⁽³²⁾といったが、彼の作品は、彼の生涯そのもののように、発育不全で不幸な環境のもとに制作されたことを、雄弁に物語っている。文学史の中で、コリンズと同じところに位置づけられる前期浪漫派の詩人たち、クーパーやスマートやチャタトンが同様に不幸な生涯を送ったことも十分理解できるように思われる。コリンズの数少ない作品の持つ未完成さを憐れむとともに、生みの苦しみを自ら体現しているその作品集に、やはりそれなりの価値を認めたいと願うものは、あながち筆者のものであるまいと思われる。

(29) L. スティーヴン「18世紀における英文学と社会」岡本圭次郎訳、研究社、昭和31年

(30) ここにいうジェントリー階級という概念は、①大貴族より下層にしてヨーマンより上層の地主、②法律家、僧侶、医師のごとき上流職業人、③主として貿易業にたずさわる富裕な商人、以上三者の総体を呼ぶもので、この定義は、角山栄「資本主義の成立過程」(ミネルヴァ書房、昭和31年)の中に採用されており、もとは、R. H. Tawney が「The Rise of the Gentry」なる論文の中で規定したものである。

(31) 'The scepticism about exiting society engendered by the revolutionary ferment impels the more imaginative minds into a new communion with nature.' G. Hough: "The Romantic Poets" Hutchinson & Co., London, 1957

(32) 'Almost everything that is good in Collins belongs to the man; almost everything that is not good belongs to the time.' G. Saintsbury: "Cambridge History of English Literature Vol. X"